２０２５／０１／２６　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：神の御心を求めるとは
聖書箇所：随所

今朝、皆さんと一緒に考えてみたいのは、「神のみこころを求めるとは、どういうことなのか？」ということです。立ち止まってちょっと考えてみてください。自分の歩みを振り返ってみるとき、果たしてあなたはどのようにして神様のみこころを求めてきたでしょうか？言うまでもなくそれぞれが、すでにこれまでにもさまざまな選択を迫られる場面に遭遇してきたかと思います。どんなことをきょうの午後、あすしようかとか、どんな学校に行って、どんな仕事に就いて、どんなキャリアを目指そうかとか、どんな場所に住んで、どんな人と結婚して、どんな子育てをしようかとか、どんな教会に通って、どのような働きをして、兄弟や神様に仕えようかとか……。挙げればきりがありませんが、間違いなくここにいるひとりひとりも、小さなものから大きなものに至るまで、今までいろいろな決断をしてきたかと思います。そして、そんな決断の場面はこれから先も同じようにやって来るでしょう。自分の前にいくつかの道があって、どの道を進んでいくのがみこころにかなうことなのだろうかと、思い悩んだりすることもあるでしょう。

確かに多くの人たちが「みこころ」ということば自体は、耳にしたことがあります。「それを祈り求めないといけませんね。」と頻繁に口にはしているかもしれません。でも実際はどうでしょう？どの仕事やどの学校を選ぶべきなのか、だれと結婚するべきなのか、そのようなことがはっきりと聖書には書いていないからこそ、なるようになるかと考えて、結局のところは自分の思いどおりにしようとしているのかもしれません。また、自分の取る選択がみこころなのかどうなのかをいつも不安に思っていたり、その選択が今だけではなく将来にも影響を及ぼすからこそ、恐れを抱いてしまったり、恐れていつまでも決断を後回しにしているかもしれません。今置かれたこの状況の中で、いったい神様は私に何を望んでおられるのだろうか……この問いがぐるぐるぐるぐる頭の中を巡り続ける経験をしたことがあるのは一度だけではないでしょう。だからこそ、きょうは少しだけ時間をとって、この「神のみこころを求める」という大切なテーマについて皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

感謝なことには、羊飼いである神様は羊である私たちに、何の助けも手がかりも残してくださっていないのではありません。神様はご自身のみこころをすべて隠してしまっていて、途方もない荒野の中からそれを頑張って探してくださいよと、天からご覧になっているのでもありません。あわれみ深い神様は、私たちが知るべきご自身のみこころを、何よりもこのみことばの中に示してくださっています。この方は、私たちがそれに従って日々歩んでいくことを、ともにいて導き、助けてくださる方でもあります。またもっと言うと、皆さんひとりひとりがみこころに従って歩んでいこうとするそのとき、私たちはほかのだれでもない、私たちの愛する主の模範に倣うことになります。

●イエス様の模範

覚えていますか？愛するイエス様は地上での歩みにおいて、最初から最後まで父なる神様のみこころに忠実に従っておられました。ヨハネ６：３８にこう言われています。「**わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。**」またそれ以外にも、ルカ２２：４２でイエス様が十字架にかかる前にこう言われるのです。「「**父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。**」」と。私たちも今、同じようにしてこの地上にあってキリストに似た者になっていくことを目指して、神様の栄光を現す者として生かされています。いつの日か主にお会いするその日を楽しみにしながら、その最後の時まで神様のみこころを忠実に求めていくわけです。あとでまた詳しく見ますが、パウロもこんなことをローマ１２：２で述べていました。「**この世と調子を合わせてはいけません。いや、む**

しろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」と。私たちはみな、神のみこころに従って神様の前に何が喜ばれるのかを考え、それに従う者として生きていこうとしています。だからこそ、神のみこころとは何なのかについて、正しくみことばから理解するのは大切なことです。聖書の全体を通してこのテーマについて教えてくれていることを、早速見てみましょう。

〇神のみこころを求めるとは：

１．聖書に登場する“二つのみこころ”

まず、この「神のみこころ」というものの内容を正しく理解していく上で抑えておきたいのは、聖書に登場してくる二つの「みこころ」というものです。ご存じの方もおられるかもしれませんが、私たちが聖書を読んでいくと、いろいろな箇所で実際に「みこころ」ということばを目にします。ただ、そのことばには実は大きく分けて、二つの使われ方、二つの分類がありました。どんなものでしょう？一つは「主権的みこころ」と呼ばれるもの、そしてもう一つは「命令的みこころ」と呼ばれるものです。「主権的みこころ」と「命令的みこころ」。それぞれいったいどのようなものなのか、ちょっと時間をかけて見てみましょう。

１）主権的みこころ

まず、一つ目に「主権的みこころ」から見ていきましょう。「主権的みこころ」というのは、神様ご自身が永遠の始めからすでに定められておられる、決して変わることのないみこころのことを指しています。言い換えれば、神様が決められたことはすべていつも必ずそのとおりに起こる、ということです。だれにもそれを妨げることも、それを止めることもできません。詩篇の著者もこんなふうに述べています。詩篇３３：１１「**【主】のはかりごとはとこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。**」また同じ詩篇１１５：３にもこう書かれています。**「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行われる。**」神様が決められたことはすべて、いつも、必ずそのとおりに起こると。

この「主権的みこころ」というものは、ほかにも「隠されたみこころ」と呼ばれることもあります。「隠されたみこころ」…なぜそう呼ばれるのでしょうか？それはその名のとおり、このみこころというのは、定めた神様だけがご存じで、私たちには一切知らされていないからです。隠されているのです。そして、それが私たちに明らかになるのは、いつだと思いますか？それが私たちに明らかになるのは、唯一その定められたことが実際に起こったときだけ、そのときだけ私たちにわかるのです。ですから、神様の隠された「主権的みこころ」というものは、この世界で起こっているすべてのことに対して神様がいつも主権を持っておられるのだということ、その事実を私たちに教えてくれるのです。

では、実際にどんなふうにそれが見て取れるのでしょうか？いくつかの「みこころ」ということばが登場する箇所を見てみましょう。きょうは一つの箇所を見るというより聖書全体を皆さんと一緒に見ていきたいと思います。例えば旧約聖書に戻って、ダニエル書４：３４－３５を見ていただくと、覚えているかと思いますが、非常に高慢になったネブカデネザル王様に対して、神様はさばきを下しました。そしてそのあとで起こった出来事が、この３４－３５節に書かれています。こう言われていました。「**:34 その期間が終わったとき、私、ネブカデネザルは目を上げて天を見た。すると私に理性が戻って来た。それで、私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きる方を賛美し、ほめたたえた。その主権は永遠の主権。その国は代々限りなく続く。:35 地に住むものはみな、無きものとみなされる。彼は、天の軍勢も、地に住むものも、みこころのままにあしらう。御手を差し押さえて、「あなたは何をされるのか」と言う者もいない。**」たとえ、どんなに地上で力や名声を持った偉大な王様であったとしても、神様の前では無に等しい者でした。神様の持っておられるみこころを差し押さえることのできる者はひとりとしていない、というわけです。旧約聖書だけではなく新約聖書にも同じことが見て取れます。今度はエペソ１：１１でパウロもこう述べています。「**この方にあって私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画のままをみな**

行う方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。」「神様の永遠のご計画」このご計画は、私たちの救いにおいても同じでした。何か偶然それが起こるのではありません。世界の基が置かれるその前から、神様はご自分で定められておられることを成し遂げられたに過ぎないのです。

また、この「主権的みこころ」というのは、何も大きな出来事にだけ及ぶものではありません。日常に起こるささいな出来事に関してさえ、同じでした。大きなものだけじゃなく、小さなもの、どんなところにも常に神様の主権の御手というのは存在するのです。マタイ１０：２９－３０にこんなふうに書いています。「**:29 二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。:30 また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。**」と。私たちには、それが実際に起こるまでは何も分かりません。でも、文字どおりすべてのものが神様のみこころのうちに起こっています。ほかのだれでもない神様ご自身が計画をあらかじめ定めて、そしてその計画のすべてを、いつも、必ず、ご自身の栄光を現すために成し遂げられるのだ、というわけです。小さな雀から大きな象に至るまで、その生も死もすべてを支配しておられるのは、最初から神様です。今から何世紀も前に君臨していた王様から、今の時代の総理大臣や大統領に至るまで、その繁栄も没落もすべてを支配しておられるのは、最初から神様です。私たち自身の日々の生活の中に起こる大きなことも小さなことも、その一つ一つの出来事も支配しておられるのは、最初から神様です。それが実現するまでは、私たちには知るよしもありません。知らないから、だれにも覆すことなんてできません。あらかじめ神様が定めておられることは必ずそのとおりに成し遂げられるというのが、この「主権的みこころ」というものでした。

２）命令的みこころ

そして、「主権的みこころ」とは別に登場するのが、二つ目の「命令的みこころ」というものです。この「命令的みこころ」ですが、これは、隠されている「主権的みこころ」とは対照的に、「明らかにされたみこころ」と呼ばれることもあります。神様が福音や聖書を通して被造物に明らかにされた、はっきりと命じておられる「みこころ」のことを指しています。皆さん、違いがよくわかりますか？つまり「主権的みこころ」というものが、神様が何を成されるのか、であるならば、この「命令的みこころ」というのは、神様が人々に何を求めておられるのか、を表しているわけです。だからこそ、決して決して破られることのない「主権的みこころ」とは違って、この「命令的みこころ」は、人々によって破られることもあります。神様が人々に望んでおられることが明白に記されているこの聖書。この聖書の中にある戒めも律法も、本来すべての人たちが喜んで従うべきものですけれども、実際には人々は日々それを無視したり、それに背いていたりするのです。

この「命令的みこころ」ということばの使われ方をもって、私たちはほかにも聖書の箇所を見て取ることができます。少し戻ってマタイ７：２１を見てみましょう。“山上説教”の中で、イエス様がこのように宣べておられました。「**わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。**」と。天の御国に入る者には、何が求められていましたか？その者は、父なる神のみこころを行うことが大切でした。命令に従うことが欠かせないのだ、というわけです。イエス様だけではりません。ほかの人たちも言っています。Ｉヨハネ２：１５－１７で、ヨハネも信仰者たちに向かって次のように述べていました。「**:15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。:17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。**」ヨハネは神様が信仰者に求めておられることを伝えていたのです。神様のみこころに沿って歩んでいく者というのは、世を愛さずに、肉の欲や目の欲、暮らしきの自慢に対して、ＮＯを突き付ける者なのだというわけです。ですから、神様が望んでおられるキリストに似た者へと日々私たちが

変わっていきたいと願うなら、どうします？当然、私たちはキリストが歩まれたその姿を知り、それに目を留め、それに倣い、その足跡に従っていくことが求められます。神様は、私たちがそのようになることができるように、そのために必要な命令であったり、戒めであったり、励ましであったり、助けというものを、何よりもこのみことばを通して私たちに、もうすでに明らかにしてくださっているのです。

最初にも触れましたが、パウロの書いたローマ書１２章をもう一度見てみると、パウロは、信仰者たちがどのようにして歩んでいくべきなのか、その歩みの様子を分かりやすく描いてくれていました。私たちひとりひとりにも何が求められるのか、ローマ１２：２をよく見てください。「**この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。**」と。ちょっと皆さん、クイズですけれど。ここで出てきましたよね、「みこころ」ということば。「**神のみこころ**」ということばが出てきました。ここでパウロが用いていた「**神のみこころ**」は、どっちのことを言っていると思いますか？主権的みこころの話をしているのでしょうか？それとも命令的みこころの話をしているのでしょうか？どちらかすぐ分かったという人もいるかもしれません。でもまだよく分からないという人のために、判断する上で鍵になることばが途中に出てきました。よく見てください。こう言われていましたよね。**「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために**」と。ここで「**わきまえ知るために**」と訳されていたことばですが、これには元々、「何かが本物かどうか、信頼できるかどうか、それを判断するために試験にかける」という意味が含まれています。もう少し言うと、「入念に検査する」とか「吟味する」といった意味で使われることもあります。入念に検査するのです、吟味するのです。つまり皆さん、救われた信仰者というのは、世と調子を合わせるのではありません。私たちひとりひとりは、神のみこころが何なのかということを常に吟味しながら、調査しながら、検査しながら、歩んでいこうとするのです。どこに示された、どのみこころを求めていくのですか？それは、このみことばの中にはっきりと記された「命令的みこころ」を私たちは求めて、それを検査しながら、それを吟味しながら歩んでいこうとするわけです。どんな時も聖霊の助けを祈り求めながら、神様の前に、何が望まれるのだろうか？何が喜んで受け入れられるのだろうか？と。もうすでに聖書を通して私たちに明らかにされているものを綿密に検査しながら、私たちは生きていこう、神様を喜ばせるために歩んでいこうと、そのようにして私たちは礼拝者として生きていくのです。キリストに似た者となっていくために、神様ご自身が私たちにみことばを通して明らかにしてくださったそのみこころ、それが「命令的みこころ」というものでした。

どうです？皆さん、二つあるのです。ここで重要なことを一つ覚えておいてください。私たちが普段「神のみこころを求める」という話になったとき、多くの人たちが、前者「主権的みこころ」にのみ目が奪われていることがあります。神様しか知らないもの、私たちには実現するまでは何もわからないもの、それだけにずっと目を留めていて、もうすでに示されている命令や教えに従順であることをかたくなに拒んでいたりすることがあります。「神様、私にみこころを教えてください。」と祈りながら、もうすでにここに記されているそのみこころに耳を傾けようとしない、ということがあります。かつてＲＣスプローという先生もこんなことばを残していました。「現代のキリスト教会における大きな悲劇の一つは、多くのクリスチャンが神の隠された御心に執着するあまり、命令的なみこころを軽視し、無視していることです。私たちは覆いの向こう側をのぞき見、自分の個人的な未来を垣間見たいと願っています。自分たちの従順よりも星占いに、自分たちが何をしているかよりも、星の軌道がどうなっているかに関心があるのです。」と。どうでしょう？私たち自身、神様のみこころを求めるそのとき、私たちは何に一番心を留めているでしょうか？

もちろん、主権的なみこころが成し遂げられるということ、神様があらかじめ定められていたことがすべて成し遂げられるということ、それを私たちが祈り求めることが間違っているわけではありません。私たちは自分自身の願いや思いではなくて、神様のみこころがなされますように、神様の栄光が現されますようにと、そのことをどんな時も心から願い、それを祈り求め、それに信頼し続けること。もちろんこれはとても大切なことです。でも同時に私たちが忘れてはいけないのは、そのときに私たちひとりひとりには必ず責任があるのだということです。それぞれが、置かれているその状況の中で待っているのかもしれませんが、もうすでに神様が明らかにしてくださったそのみこころに心を留めて、私たちはそれに従っていくことが求められるのだということです。皆さん、それが、キリストに倣う者として生きていこうとする私たちにとって、絶対に欠かせないことでした。すでに示されているものに目を向けること、まだ示されていないものを祈り信頼すること、この二つは、私たちにとって両方欠かせないのです。

さて、ここまで私たちは聖書に登場する二つのみこころについて考えました。「みこころ」ということばには、そもそも神様が何をなされるのかという「主権的みこころ」と、神様が私たちに何を求めているのかという「命令的みこころ」があるということを見たのです。そして、この二つのみこころのあり方を正しく覚え続けているなら、私たちは普段の生活の中にあって、神様のみこころをそれぞれが求めていく際、何に心を留めているべきなのかという大きなガイドラインを、みことばのうちに見出すことができます。この二つの下で、私たちはいろんな選択をしていく上で、大きな助けとなるガイドラインを聖書の中に見出すことができます。言っておきますが、これ以外にも、もちろんたくさんのガイドラインがあり、この時間ですべて触れることはできません。ただ、皆さんにとって助けになればと思うので、何かの選択をする際に、少なくとも道しるべとなる、助けとなる四つのガイドラインを、残った時間で見てみたいと思います。私たちがみこころを求めて歩んでいくそのとき、私たちの助けになる四つのみことばが教えるガイドラインです。

１）神の国とその義を第一に追い求めること

私たちが覚えておくべき一つ目のガイドラインは「神の国とその義を第一に追い求めること」です。マタイ６章を開いていただいて、ご存じのとおりマタイ５－７章まで続く“山上説教”の中で、イエス様がこう言われるのです。マタイ６：３１－３４「**:31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。:32 こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。:34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。**」多くの人たちは、いろいろな出来事が起こるとき、日々不安に思うことがあります。特に衣食住という人にとって必要不可欠なものが脅かされてしまえば、自分の生活に深く結びついているものが揺るがされてしまえば、心が騒いで心配や恐れを覚えてしまうでしょう。でもイエス様は、そのような私たちにとって必要不可欠なものを挙げて、こう言われていたのです。「**何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などといって心配するのはやめなさい。**」と。「私たちにとって最も根底的なそのようなものが、たとえあろうがなかろうが、心配するのはやめなさい。」と。でも、いったいどうして心配する必要がないのでしょう？なぜイエス様は「**心配するのはやめなさい**」と命じておられたのでしょう？それは、神様がすべてを支配しておられる主権者だからでした。神様が私たちに必要なすべてのものを知っていてくださり、神様がすべてのものの所有者であられ、神様が必要なすべてのものを与えることのできる力をも持っておられる、そんなお方であるからこそ、私たちは不安や心配を抱くのではなく、その神様にただ信頼する、ということが求められていたのです。神様がすべてのことを支配されている主権者だから、心配するのはやめなさいと。言いかえれば、不安や心配、恐れというのは、実は信仰者に

とって、持っていても仕方がないもの、ではありません。それらは神様を信頼していない不信仰の心から生まれてくる、罪深い実でした。私たちは日々の生活の中で、確かに、あすどうなるのか知りたいと思ったり、あすどんな決断や選択をするべきなのかを教えてほしいと思ったりすることもあります。でも私たちがいつも覚えていられること、それは、すべてのはじめからあすのことを知っておられ、すべてをみこころのままに成すその全能の主権者が、私たちの必要をいつも覚えていてくださるということです。すべてを思いのままにだれの力に拠り頼むこともなく、ご自身の力のみですべてを成すことのできるそのお方が私たちの必要を知っていてくださり、私たちにそれを与えることができるのだと。その約束があるからこそ私たちは心配する必要はないのだというわけです。

そしてその事実を私たちが知っているのであれば、私たちに問われることは、どんな時もまず第一に神の国とその義を求めることでした。私たちは、具体的にいろいろなものを求めること、選択すること、いろんなときがあります。でもその時こそ、まず神様の御手に信頼して、神様の主権に自分の身をゆだねることが欠かせなかったわけです。私たちはいろんな選択をするときに、自分自身が、自分の必要が、自分の願いが何よりも優先されて、それが自分の主人になってしまうことがあります。でも最も大切なことは、私たちがどんな選択をするときも、神様とそのみこころが主人になるべきだ、ということです。それをいつも主人としてみこころを求めていくということ、それが私たちにとって大切な一つ目のガイドラインでした。

２）聖くなることを追い求めること

二つ目のガイドラインは「聖くなることを追い求めること」です。今度はＩテサロニケ４：１－３に、明らかにされた神様のみこころが示されていました。「**:1 終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。:2 私たちが、主イエスによって、どんな命令をあなたがたに授けたかを、あなたがたは知っています。:3 神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、**」と。多くの人たちは、自分に対して神様が望んでおられることをもっと具体的に知りたいと願っていたり、神様のみこころがいったい何なのだろうかといろいろなところを見て懸命に探し求めていたりします。でも残念ながら、すでに明らかにされているものに目を向けていないことがあるのです。でも皆さん、書いてありましたよね。あまりにも明白に記されていました。神のみこころは何でしたか？神のみこころは、私たちがますます聖くなっていくことでした。神様を喜ばせる歩みをしようとするなら、キリストに似た者となろうとするなら、私たちは外側だけでなく、内側においても、もっと言えば、からだやふるまいだけでなく、考えや思いに至るまで、あらゆる面において罪や汚れから離れて、聖さを追い求めていくということが欠かせないのだ、というわけです。続きの７－８節にこう書かれています。「**:7 神が私たちを召されたのは、汚れを行わせるためではなく、聖潔を得させるためです。:8 ですから、このことを拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたに聖霊をお与えになる神を拒むのです。**」キリストを信じる信仰によって恵みによって私たちが救われたのは、何もそのあとは自分の欲のために生きていきましょう、ではありません。天国行きのチケットを手にしたから、あとは自分の願いや自分の望みをかなえるためにすべての時間を使っていきましょう、ではありません。神様が私たちをあわれんで救って召してくださったその一つの大きな目的、それは「**聖潔を得させるため**」でした。かつては、確かにみんな汚れや悪の中に囚われていて、ひたすら自分の肉の欲に従って生きていました。罪を何よりも愛して、その奴隷として歩んでいました。でも、そこから解放されて、そこから新しく造り変えられた者たちは、日々神様を愛して、失敗はすれども悔い改めて、神様の愛する聖さというものをますます愛し、自分自身悪から離れて少しでも聖い者になっていきたいと、そのように歩んでいこうとするのです。それが、救われたすべての者に与えられている神様ご自身からのみこころでした。ですから、この召しの目的をかたくなに拒むというなら、それはささいな問題では

ありません。その人は、そのみこころをお与えになった神様ご自身を拒絶することだ、と言われていたのです。

だからこそ、ちょっとよく考えてみてください。ある人は日々の生活の中で、神様のみこころをいろんな場面で具体的に示されたいと祈り求めているかもしれません。自分の時間をどのように使おうかと考えているかもしれませんし、仕事や家庭のあり方をどうしようかと思い悩んでいるかもしれません。それ自体は何も間違っていることでもないし、それ自体は良いことでしょう。でも、どうですか？そのようなことを求めるよりも前に、まず神様の前に「聖くされていく」ということを、本当に求めているでしょうか？明らかにされているそのみこころをほったらかしにして、それ以外のものに目を向けていないでしょうか？目で見るもの耳で聞くものは、汚れたものや悪からますます離れようとしているでしょうか？抱く思いや考えは、神様の喜ばれる正しい聖いものへと次第に変えられているでしょうか？神様が代価を払ってくださったこの私たちのからだは、不品行から離れ、純潔を求めて、ますます神様の栄光を現そうとしているでしょうか？ いろんなことを確かにみこころとして追い求めることはできます。でも皆さん、これを私たちが無視しているなら、どうやってほかのことを私たちがかなうようにと求めることができるでしょうか？そして、もし、私たちが、キリストが聖くあられるように聖くなっていくことを何よりも願い求めているなら、私たちは何かを選択するときにも、自分にいつも問い続けることができます。果たしてこの選択を私たちが取るとき、自分は聖さにおいて成長することになるのだろうか？この選択をするとき、自分がますますキリストに似た聖い者になるその助けになるのだろうか？それとも、それを妨げることにならないだろうか？……と。もし最後のものであるなら、それはみこころではないということです。どんなときも私たちは聖くなることを追い求めていく、それが皆さん、私たちがみこころを求めていくときに大切な助けになる、二つ目のガイドラインでした。

３）いつも喜び、祈り、感謝することを追い求めること

そして、三つ目のガイドラインは「いつも喜び、祈り、感謝することを追い求めること」です。同じくＩテサロニケ５章の中にも神様のみこころがはっきり示されていました。５：１６－１８「**いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。**」最後の部分、日本語の訳だと「**神があなたがたに望んでおられることです**」となっていると思いますが、原文そのままに直訳すれば、ここは「これが、キリスト・イエスにあってあなたがたへの神のみこころです。」とも言えます。「**あなたがたに望んでおられることです**」は、元々は「あなたがたへの神のみこころです」と訳すことができるのです。さっき私たちが見た４：３で**「みこころ」**と訳されていたのと同じことばが、ここにも使われていました。つまり、神のみこころとは何か？それは、「私たちが、いつも喜んで、絶えず祈って、そしてすべてのことに感謝することだ」ということです。あまりにもシンプルなことに聞こえるかもしれません。それでも皆さん、神様を喜ばせる歩みを私たちが望んでなしていこうとするなら、キリストに似た者へと変えられていこうとするなら、神様は、私たちがどんな状況にあったとしても、喜びにあふれて、祈りに励んで、感謝をささげる者として成長していく、ということを望んでおられるというわけです。

立ち止まって一緒に考えてみてください。果たして私たちは、いつも自分とともにおられるその神様を見上げて喜んでいる人でしょうか？絶えず神様に信頼して祈りに専心している人でしょうか？また私たちはどんな状況にあっても、神様の前に心からの感謝をささげている人でしょうか？みことばを見ていくと興味深いことに、まさにみことばは、感謝しない者、感謝しない心を、神様を知らない者を表す特徴の一つとして何度も描いているということです。神様を知らない者は、感謝をしない者でした。例えばローマ１：２１にもこんなふうに書いています。「**それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。**」と。神様を拒んでいる者たちの様子として「感謝をしない」と言われていました。また、Ⅱテモテ３：１－２も

同じです。「**:1 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。:2 そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、**」と言われているのです。そして私たちも同じでした。生まれながらの私たちは、だれも造り主である神様を受け入れようとせず、代わりに造られたものを拝んでいました。感謝もせずに、罪に罪を重ねていたのです。すべてを与えてくださる神様に感謝することもなかった私たちは、まさに罪にまみれ、神様の栄光を汚し、永遠のさばきを受けてしかるべき御怒りの子らとして歩んでいました。でも、そんな私たちが恵みによって、キリストを信じる信仰によって救われたのだということを知ったとき、私たちのうちにはあふれんばかりの感謝が現れたのです。キリストがどれほど大きな犠牲を払ってくださり、私たちの罪の代価を払い贖ってくださったのかを知ったその時、私たちのとれた自然な応答は、ただ神様に感謝をささげることだったのです。それが感謝の理由だからこそ、私たちは自分の都合の良い時だけ感謝するのではありません。測り知れない恵みを受けた者としては、良い時であろうが悪い時であろうが、変わらずに喜びや感謝を見出すことのできる理由をいつも神様のうちに持っていました。すべてのことについて感謝するということ。これこそ信仰者ひとりひとりに与えられている特権でもあって、またそれは、私たちにとっての神様のみこころでもあったのです。皆さん、感謝する者として私たちは歩んでいくことができます。

そして同時に凄いのは、この「感謝する」ということは、私たちがさまざまな誘惑や戦いに勝利するためにも大きな助けになるものでした。どういうことかと言うと、先にも見ましたが、例えば、私たちの多くは不安や恐れを抱いてしまうことがあります。それと戦わなければいけません。私たちに戦うために助けとなるのは何か？みことばはこう述べています。ピリピ４：６「**何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。**」パウロは言うのです。「いろんなことがあった時に不安や恐れを抱くのではなく、何も思い煩わないで、その代わりに感謝を持って祈りをささげなさい。」と。「**感謝**」は、不安や恐れと戦うだけではありません。例えば、先ほど見た性的な誘惑や不品行、汚れた思い、そういったものに心が騒いでしまうような時も、私たちにとって大きな助けになるのは「**感謝**」でした。みことばはこんなふうに述べています。エペソ５：３－４はこのような流れで言われています。「**:3 あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、不品行も、どんな汚れも、またむさぼりも、口にすることさえいけません。:4 また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。**」そのあと何て書いてあります？「**むしろ、感謝しなさい。**」と書かれています。結びついていないように聞こえるかもしれませんが、パウロは言うのです。「そのようなものから離れなさい。汚れのようなものから離れなさい。むしろ感謝していなさい。どんな時も、私たちの救いを思い出して、神様の偉大なご性質を思い出して、いろんなことによって感謝していなさい。それがあなたの心を汚れから守ってくれます。」と。だから皆さん、私たちにとって「**感謝**」というのは、歩みにとって欠かせないものでした。感謝は、私たちの心を不安や汚れ、さまざま罪や誘惑から守ってくれるだけでなく、まさにそれこそが、神様が私たちに望んでおられる明らかにされたみこころだったのです。

そして、だからこそです。私たちが何かを選択するような場面や、みこころを祈り求めている場面、そんなときにも自分に問いかけることが、いつでもできます。果たして私が取ろうとしているこの選択は、神様に対する感謝を生み出すものなのか？それとも、そうでないのか？と。感謝する者として私たちが生きている以上、もし取る選択が神様を喜ばせるものでないなら、神様に感謝をささげるものでないなら、それは、みこころではないということです。いつも喜んで、祈り、感謝することを追い求めること、それが三つ目のガイドラインでした。

４）あかしのために善を行うことを追い求めること

そして最後に、四つ目のガイドラインは「あかしのために善を行うことを追い求めること」です。簡潔に見たいと思いますが、もう一箇所だけ。今度はＩペテロ２：１３－１５にこう記されています。「**:13 人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、:14 また、悪を行う者を罰し、善を行う者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。:15 というのは、善を行って、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。**」天に国籍を置いている信仰者にとって、この地上は本当の住まいではありません。ただし、それは、この地上での責任を一切放棄することを意味しているわけではないのです。神様は、ひとりひとりが神様の立てられた権威にみずから進んで従っていくことを、求めておられました。もちろん、政府や政治家が悪や神様に逆らうことを強いるような場合は別ですが、そうでないなら、周りの人たちが何を言おうとも、私たちはその権威に尊敬を払って喜んで従っていくことが命じられているのです。それが神様のみこころでした。でも、いったいなぜそのような行動を取ることが大切なのでしょう？何の目的のために私たちは立てられた権威に従っていこうとするのでしょう？みことばは言っていましたね。１５節「**というのは、善を行って、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。**」と。ここで使われていた「**口を封じる**」ということばですが、これは元々「沈黙させる」という意味が含まれています。だれかの口をふさいで何の応答もできなくさせることを表していました。しゃべれなくさせるのです。つまり私たちは、教会の中だけではなく、この世にあっても、どんな時も変わらずに善を行い、神様にも人にも喜んで仕えて、誠実に歩んでいこうとします。そうすれば、福音を拒絶しているような者たちでさえ、その人に対して何の反論もできなくなるのだと、そんなあかしを立てることになるのだというわけです。

でも、これは容易に想像できません？例えば、私たちが口ではいくらでも立派なことを、正しいことを語っていたとしても、その行いがそれをいつも否定しているようなものであったなら、周りの人は私たちをどう見るでしょう？間違いなく私たち自身が非難されるだけでなく、伝えたいメッセージや神様までもが軽んじられることになってしまいます。神様のすばらしさを宣べ伝えて、キリストにある救いやキリストにある喜びやキリストにある希望をあかししていく、そんな証人として生きている私たちには、どんな時もどんな場所にあっても変わらずに善を行って歩んでいくことが求められていました。私たちを通して神様のすばらしさを人々が見ることができるようにと、そのようにして歩んでいこうとするのです。それが私たちに明らかにされたみこころでした。だから皆さん、もし私たちが何かを選択しようとしているなら、みこころを追い求めているのであれば、自分に問いかけてみることができます。果たしてこの選択をすることが、周りの人たちにとっても神様のすばらしさを知ることができる機会につながるのか、それとも、福音を拒絶している者たちが口を開いて自分を非難するだけでなく、神様をも非難することにつながらないか、どちらなのかということです。そしてもし後者であれば、それは、みこころではないということです。あかしのために進んで従い、いつも善を行うことを追い求めていくこと、それがみこころを求めるうえで助けになる四つ目のガイドラインでした。

最後に皆さん、私たちはこうして神様のみこころを学んできました。言えることは、神様のみこころを求めるというのは、途方もない広大な荒野から隠されている秘宝を探すようなものではないということです。覚えていてください。たとえ私たちにはわからないことがあったとしても、私たちの神様は、どんな時もすべてをご存じであられ、そして、私たちがどうかではなく、そのすべてのものをご自身の栄光を現すために成し遂げられるということです。私たちはいつも、主がすべてのことを支配しておられて、そして神様を愛し、神様の計画に従って召された人たちのためには、すべてのことを神様が益としてくださると約束してくださったことを、覚え続けることができます。（ローマ８：２８）いつも支配しておられるそのような神様に私たちは信頼して、そこにどんな時も、平安を、慰めを見出しながら歩んでいくことができるということです。そして同時に、同じ神様が私たちにみこころを教えるためにこのみことばを与えてくださいました。助け主としての御霊をも与えてくださいました。だとすれば、

どんなときも御霊の助けを祈り求めながら、まず第一に神の国とその義を求め続けていくことです。いつも聖さを求めて、喜びと感謝することを求めて、あかしになることを求めながら、神様とそのことばに信頼して、一つ一つのことを選択してなしていくことです。そのようにして神様のみこころを忠実に求める歩みを、もちろん神様は喜んで愛してくださいます。ですからぜひ、皆さん、みことばからますますみこころをともに知って、キリストに似た者となることをともに目指して、今週も神様の栄光のために歩んでいきましょう。